慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	J. Kuczynski, Labour Conditions in Western Europe 1820 to 1935, London 1937
Sub Title	
Author	藤林, 敬三
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1937
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.31, No.7 (1937. 7) ,p.1069(141)- 1082(154)
JaLC DOI	10.14991/001.19370701-0141
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19370701-0141

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

J. Kuczynski, Labour Conditions in Western Europe 1820 to 1935, London 1937

藤林敬三

一

今日、吾々は勞働、乃至勞働者の生活狀態に關して、尙ほ部分的には甚だ不充分ではあるが、諸種の統計資料を有してゐる。しかしこれ等の統計資料の各々が單獨にて充分よく一國の勞働者の狀態を示すものであると考へることは早計であつて、從つて吾々に取つては先づ諸種の統計資料を系統的に利用することが主要の問題となる。これと同時にまた比較的長期間に渡るこの系統的、統計的觀察から、勞働者の生活狀態に關する變化、即ち彼等の狀態の改善と惡化、向上と低下の趨勢を確認することが必要であり、また重要である。そしてこの後の問題から見ると、先きの問題は謂はゞ一つの基礎的先決問題たるに過ぎない。

資本主義の下に於ける勞働者の狀態、彼等の運命に關しては、吾々は旣に悲觀と樂觀の種々なる理論上の判斷を與へられてゐる。しかしその各々の理論上の判斷は現實に實證され、或は基礎づけられねばならない。そして此處に吾々は一方では詳細に渡る勞働階級史の研究を重要視し、他方では特に相當の期間に渡る統計的觀察を通じて勞

J. Kuczynski, Labour Conditions in Western Europe 1820 to 1935, London 1937.

働者の狀態の趨勢を確證し、これを解釋しなければならない。しかもその何れもが吾々に對しては既に甚だ大にして、且つ多くの困難を伴ふ研究任務であることは云ふまでもない。しかしこの問題に關して、最近クチンスキーは過去相當の期間に渡つて繰返された彼の統計的研究の、謂はゞ一應の結末として、吾々に對して甚だ有意義な研究業績を示すに至つてゐる。それこそ私が此處に紹介しやうとする所の、彼の新著「一八二〇年より一九三五年に至る西歐に於ける勞働者の狀態」（一九三七年）である。

此處で私は勞働者の狀態に關する、クチンスキーの從來の研究に就いて多少の言を費して置くことは、讀者のために必ずしも無意義でないと考へる。彼は過去十年の間に歐米各國に於ける賃銀及び一般に勞働者の狀態に關する數冊の研究を公にして來てゐるのであるが(註一)――勿論この間に於ける彼の統計的研究は單にこの方面だけに限られてゐるのではない――彼は先年遂に「一八七〇年より一九三三年に至る、ヨーロッパ及びアメリカに於ける勞働者階級の發展」（一九三四年）(註二)なる著作を公にした。しかも彼は今やその統計的觀察の範圍を正に五十年過去に遡つて、右の研究を更らに擴充してゐる。かくて最近の彼の研究は、若しカンニンガムに從つて英國の產業革命が大體一八四〇年に終るとすれば、產業革命の後期から今日に至るまでの、從つて大體資本主義的工場制度の發展の初期以來の勞働者の狀態の發展傾向を、吾々に示さうとするものであると云つていゝ。しかし此處で吾々の見逃してならないのは、彼の研究が單にその觀察の範圍を擴大したといふだけではなく、それがこの量的擴大と共に著しい質的發展を示してゐるといふことである。即ち彼の先きの著作に比較すれば、資本主義の下に於ける勞働者の運命に關する彼の見解は、遙かに明瞭な形態を取つて現はれて居り、それは謂はゞ元來マルキストとしての彼の見解の直裁な表明である。彼は元來「マルクスに歸れ」(註三)と主張するものであつたが、唯だ茲で些か私が彼のために辯じて置き度いのは、彼のこの結論が、先きに述べたやうに、統計的研究の相當の努力の後に漸く基礎づけられたものであるといふ點である。夫れ故に私は、勞働者の運命に關する彼の過去の諸統計的研究が最近漸く一應の結末に到達した、と見做し度いのである。

（註一）讀者の參考のために、從來一般に公にせられたクリチンスキーの、賃銀並に勞働者の狀態に關する諸著作――雜誌、その他の寄稿論文は除く――を示せば次ぎの如くである。

(1) Wages and Labor's Share, Washington 1927.

(2) Löhne und Konjunktur in Amerika, Berlin 1928.

(3) Der Fabrikarbeiter in der amerikanischen Wirtschaft, Leipzig 1930.

(4) Die Lage des deutschen Industriearbeiters, Berlin 1931.

(5) Löhne und Konjunktur in Deutschland 1887-1932.

(6) Die Entwicklung der Lage der Arbeiterschaft in Europe und Amerika 1870-1933, Basel 1934.

（註二）註一中の(6)がこれである。

（註三）J. Kuczynski, Zurück zu Marx. Antikritische Studien zur Theorie des Marxismus, Leipzig 1926.

二

クチンスキーの新著作「西歐に於ける勞働者の狀態」は二つの部分、即ち理論的考究と統計的、實證的研究とからなつてゐる。

吾々は勞働者の狀態を如何にして測り知ることが出來るか。先づこれに答へることが彼の理論的考究の課題であ

つて、それは云ふまでもなく過去及び將來に於ける勞働者の狀態に關する統計的研究の指針たらしめやうとするものである。此處で簡單に先づ彼のこの理論的見解を紹介すれば、凡そ次ぎの如くである。

多くの場合に人は勞働者の生活狀態の指標として、主として賃銀、勿論眞實賃銀の統計を利用しやうとする。確かに賃銀統計は勞働者の生活の指標として重要な意義を持つてゐる。しかし理論的には眞實賃銀は決して勞働者の狀態を決定する唯一の要因でもなければ、また必ずしもその決定的な要因でもない。唯だ今日に殘された、過去の、未だ充分ならざる勞働諸統計しか利用し得ない時代に於ける勞働者の狀態に關する研究に就いては、止むなく吾々は眞實賃銀の統計に主として據らなければならないことは勿論である。

そこでクチンスキーの理論的考究は

(1) 勞働者の狀態の指標としての賃銀統計の吟味、と

(2) 眞實賃銀及びその他の諸指標の考慮

とを問題とする。

吾々が賃銀統計を作成し、若しくは利用する場合には、第一に時間賃銀と個數賃銀とを區別し、充分考慮することの必要なのは云ふまでもないが、更らに週賃銀率と週賃銀、週賃銀と實際の週賃銀所得とが各〻區別されなければならない。蓋し勞働組合と雇主との間に協定せられた週賃銀率は週賃銀に對して、舊くはその最高限を示し、近くは寧ろその最低率を示すといふ意義上の相違があり、そしてその何れにしても兩者の間に多少の開きが存するからである。また實際の週賃銀所得は殘業、若しくは時間短縮（部分的失業）に依つて相違する。

吾々が若し平均年賃銀を問題とする場合には、失業に依る賃銀喪失を考慮に加へなければならない。と同時にまた他方に於いては、災害及び疾病、更らにストライキに依る賃銀の喪失を考慮しなければならない。しかし從來行はれた統計から見ると、今日吾々は特に部分的失業の考慮が既に一般的に必ずしも容易ではなく、更らに右の目的のために充分役立ち得る所の、一般的災害統計、勞働者の保健狀態及び疾病とストライキに依つて失はれた勞働時間數に關する統計の如きを過去に就いて求めることは殆んど不可能である。

吾々が勞働者の家計上重要な賃銀を考慮する場合には、以上の諸事實の外に更らに、諸種の事情を考慮しなければならないであらう。即ち、それは先づ租稅である。間接稅の問題は物價を通じて眞實賃銀の問題の內に考慮せられることゝなるから問題はないとしても、直接稅はそれだけ賃銀を減ずるものとして考慮されねばならない。また諸種の社會保險に對する保險料の支拂も亦同樣である。がこれに反して失業保險、健康保險等の保險金の收入は賃銀に附加的に考慮されねばならない。

以上は寧ろ賃銀に關する通常の考慮であるが、更らに重要であるのは賃銀統計に於ける所謂平均に關するクチンスキーの見解である。

今假りにある巨大企業に女工が甚だ多數雇傭せられてゐるとすれば、その企業の平均賃銀は或は產業全體の平均賃銀よりも小であるであらう。また假りに一企業の勞働者が千人でありその內二百人が週五十志を受取る熟練勞働者であり、八百人が週二十志を受取る不熟練勞働者であるとすれば、その平均賃銀は $\frac{50\times200+20\times800}{1000}=26$ 弗である。所が恐慌の結果企業は六百人の不熟練勞働者を解雇し、同時に殘りの勞働者の賃銀を一樣に二割引き下げたとすれば、今や平均賃銀は $\frac{40\times200+16\times200}{400}=28$ 弗となる。即ち一樣に賃銀が二割引き下げられたに限らず、また恐慌中にも拘らず、右の例に從へば、週平均賃銀は二十六志から二十八志に增加したことゝなる。クチンスキー

はこれ等の例に依つてある不合理なものを平均賃銀が時に含意してゐることを、吾々に教へやうとする。しかもまたこの同じことは單に一企業の場合に妥當する許りではなく、一產業部門、更らに產業全體に對して、一國の全勞働者に對しても亦充分考慮されなければならない。即ち一國の工業生產の發展と共に、低賃銀部門の勞働者の增加よりも高賃銀勞働者數が遙かに著しく增加したる場合——十九世紀中の英國工業の發展に就いて見れば、纖維工業勞働者よりも鐵工業勞働者が、更らに農業勞働者の減少に比して一般に工業勞働者が著しく增加せる場合——の如き或は一國勞働人口中婦人及兒童勞働者數の占める割合の變化の如きは、正に吾々の注意を要する所である。換言すれば、平均貨幣賃銀の變化と共に吾々は常に勞働人口を構成する構造上の變化に注意しなければならない。

かくの如きクチンスキーの考慮は更らに一步を進めて次ぎの如き配慮の必要を說く。即ちマルクスの見解に從へば、一方に於ける資本蓄積の增大は他方に於ける貧困の蓄積に依つて可能とせられる。十九世紀六十年代以後の資本主義は帝國主義の發展の下に、本國內に勞働貴族を出現せしめつゝ諸殖民地に於ける勞働の搾取を强化したのである。從つて資本主義の下に於いては勞働者階級の狀態が惡化すると主張するマルクス＝レーニンの理論は、單に本國內に於ける勞働者の狀態の變化を確證するだけでは未だ克服され得ない。其處でクチンスキーは、「一般に勞働者の狀態の趨勢を分析するには、觀察せらるべき勞働者集團の範圍を決定する要因が資本にあつて、勞働者の國民性に存するのではないといふ前提から、常に出發しなければならない」と云ふ。

要之、平均貨幣賃銀の變動を見る場合には、先づ一國の勞働人口の構成的變化を考慮する必要があり、更らに同樣の考慮が本國と殖民地に渡る一國資本の支配下にある全勞働者に對して加へられなければならない。クチンスキーのこの見解こそ、マルキストとしての彼がマルクス＝レーニンの理論から暗示せられて、達し得たものとしては至極當然であるが、この見解は、彼自身が告白せるやうに、（註四）彼自身に取つては全く最近の見解に屬してゐる。確かに彼が一九三四年に公刊した、私が先きに示して置いた同種の彼の著作に於いては、全くこの種の見解は存してゐない。更らに此處で序に讀者のために注意して置き度いことは、彼の先きの著作に於いては未だ賃銀統計は各國に就いて勞働貴族の賃銀と下層勞働大衆のそれとして態々區別され、並列されて取り扱はれてゐる。しかも彼の新著作に於いてはかくの如き賃銀統計は全くその姿を現はしてゐない。そしてこのことは彼の、マルキストとしての見解の一步前進を示すものであるが、それは兎も角として、このことは明らかに平均賃銀の考察に際して一國勞働人口の構成上の變化を考慮することが必要であるといふ、彼の新見解に依つて基礎づけられてゐると見なければならない。

右の點に於いてクチンスキーの見解は最近著明な發展を示したと云はなければならないであらう。

註四　Labour Conditions in Western Europe, pp. 17-18.

三

眞實賃銀が勞働者の生活狀態を示す唯一の決定的要素でないとすれば、クチンスキーはこれ以外に如何なるものを考慮しやうとするか。此處に彼が先づ擧げるものは、元來彼の創見にかゝる「相對的賃銀」の考慮である。

眞實賃銀が勞働階級の絕體的生活狀態の變化を示すのに對して、相對的賃銀は彼等の相對的狀態の變化を知らしめるものである。換言すれば相對的賃銀は社會的總生產物に對する勞働者の分前を示すものであつて、從つてそれは同時に勞働階級を除く他の社會員の相對的狀態をも示すものでもある。

相對的賃銀指數は次ぎの如く計算せられ得る。

相對的賃銀指數＝$\frac{\text{實收貨幣賃銀}}{\text{一般小賣物價}}$：（國民一人當り生産額×$\frac{\text{一般小賣物價}}{\text{一般卸賣物價}}$）

但し何れの國に於いても一般小賣物價指數が存しないが故に、クチンスキーは右の式を次ぎの式に便宜上置き代へる。

相對的賃銀指數＝眞實賃銀：（國民一人當り生産額×$\frac{\text{生計費}}{\text{卸賣物價}}$）

相對的賃銀の計算に關して、彼の理論上の考慮を多少附加すれば、次ぎの如くである。先きの計算式に於いて、實收貨幣賃銀を小賣物價指數で割ることは一切の小賣商品市場に於ける勞働者の購買力の大小を計算することであつて、それは他の階級のものゝ購買力の大小と比較對照するためには遙かに合理的な計算である。蓋し彼の見解に從へば、眞實賃銀の計算は理論的には勞働者の消費對象物に就いてのみ合理的に行はれ得るものであるからである。——この點に就いては、私は此處に省略したけれども、彼は稍ゝ詳細な考慮を廻らしてゐる。——更らに國民一人當り生産額とは、單に消費財だけではなく、社會的總生産物量を一國人口數で割つたものである。彼が消費財の總生産額ではなく、それを含む社會的總生産を問題とした理由は、資本家の購買力が資本財にも向けられるが故である。また小賣物價指數を卸賣物價指數で割つてゐるのは、社會的總生産物の大部分が卸賣價格に於いて賣買せられ、そして勞働者の貨物購入に關係する小賣物價と卸賣との間に多少の相違があり、この相違を考慮するためである。最後に、右の相對的賃銀の計算が貨物の輸出及び輸入を考慮に入れてゐないだけ、その正確を欠くことは彼の注意する所である。

以上の如き賃銀統計に關する愼重な理論的考慮の後に、クチンスキーは短期及び長期間に渡る賃銀統計の觀察から、賃銀に關する次ぎの如き諸法則が確定せられ得るものであるとする。即ち。

（A）　短期賃銀變動の法則

(1)貨幣賃銀及び眞實賃銀は好況時には增大する。

(2)貨幣賃銀は恐慌及び不況時には低下する。

(3)失業その他に依る賃銀喪失を考慮せる貨幣賃銀指數及び眞實賃銀指數は、恐慌及び不況期には低下する。

(4)相對的賃銀は恐慌及び不況期には增大する但しこの增大は勞働者の生活狀態の絕對的向上を意味しない。蓋し社會的總生産の減少に依つてのみ勞働者の分前が增加するからである。この場合のより大なる分前（相對的賃銀の增大）は、好況期に於けるより小なる分前よりも絕體的に小である。

(5)相對的賃銀は好況期には減少する。

（B）　長期賃銀變動の法則。

長期賃銀變動の法則を理解するためには、資本主義の發展に內在する二つの事情、即ち工業と農業の相對的發展と農業及び工業上の賃銀の相違とを考慮しなければならない。資本主義の發展は工業化の發展を含み、農業賃銀は常に工業賃銀より小である。其處で先きの平均賃銀に關するクチンスキーの考慮に從つて、

(6)資本主義の向上期に於ける工業化の發展と共に、全勞働者の平均賃銀は增大する傾向を持ち、また、

(7)工業勞働者の賃銀は增大する傾向がある。蓋しより大なる賃銀が支拂れてゐる重工業部門が輕工業部門よりも遙かに著しく發展するからである。

(8)資本主義の一般的危機の到來と共に、賃銀增大の傾向は停止する。

J. Kuczynski, Labour Conditions in Western Europe 1820 to 1935, London 1937.　　一五〇　　（一〇七八）

蓋しこの時期においては工業生産力は既に過大となり、工業化の發展は停止せられるに至り、著しく深刻化した恐慌は生産手段の生産部門に甚だしい打撃を加へ、農業生産の相對的減少傾向が中止せられるに至る、等の諸現象が現はれて來るからである。

かくてクチンスキーは、資本主義の發展と共に賃銀は増大し、停滯し、減少し行く傾向を持つものであると、云はふとする。

(9)相對的賃銀は資本主義の發展に伴つて減少する傾向がある。

右の長期に渡る賃銀變動の法則は、クチンスキーがその實證的研究の部分に於いて、歴史的に確證しやうと努めてゐる所であつて、讀者が私のこの紹介文の後の部分と對照せられることを希望して置く。

四

眞實賃銀は勞働者の絶對的生活狀態に對して甚だ重要な關係を持つことは事實であるが、更らにクチンスキーは賃銀以外の他の諸要素として、眞實賃銀の増大に歸因する好影響を相殺するやうなものが存することを認めやうとする。其處で理論的には眞實賃銀の低下は明かに勞働者の狀態を悪化するものであるが、眞實賃銀の増大が彼等の狀態を向上せしめるか否かは不明であつて、簡單には回答し得られない。果して然りとすれば、吾々の問題は次ぎの如くなる。即ち（一）賃銀以外の一切の諸原因は勞働者の狀態に如何なる影響を及ぼすか、また（二）これ等の要因は賃銀に比較して相對的に如何なる意義を有するか。

賃銀以外の諸要因に關しては凡そ次ぎの如き考慮が加へられてゐる。

資本家的企業の目的は利潤にある。利潤の増大は勞働者の生産能率の増進に基づく。彼等の能率を増進するためには勞働の程度を増進せしめねはならない。確かに資本主義の下に於いては勞働强度化の傾向が存する。そして勞働の强度化は勞働者の生活狀態を悪化する。それは彼等の健康を害する。從つて彼等は從來よりもよき榮養を攝取し、より長時間睡眠し、よりよき休養を得なければならなくなる。夫れ故に勞働の强度化を强ひんがためには、資本家が勞働者に對して眞實賃銀を増加し、勞働時間を短縮し、彼等の住宅を改良し、更らにある種の休養娯樂施設さへ設けるに至るのも、この意味に於いて正に必然であり、且つそれは利潤のための資本家の賢明なる方策である。

かくて勞働諸條件の改善が勞働强度化を増進することに依つて、利潤に不都合な影響を及ぼさないものであると考へ得るとすれば、勞働の强度が増して同時に眞實賃銀が増加しない場合には、勞働者の狀態は著しく悪化する。これに對して眞實賃銀が増加する場合には勞働强度化の影響は比較的緩慢なものとなる。

勞働强度化の外に尚ほクチンスキーは、勞働者の狀態を悪化する諸種の要因を考慮し、同時にまたその影響を緩和する諸種の要因をも考慮したる後に、彼は一般的に、資本主義の下に於いては長期間に渡つて勞働者の狀態は悪化する傾向が存する、といふ見解に到達してゐる。

五

以上が大體勞働者の生活狀態に影響する諸要因に關するクチンスキーの理論的考究である。しかし此處に理論的に考究せられた諸要因の影響はその總てが、今日尚ほ信頼し得る統計的資料に基づいて確證され得るものとは限らない。特に賃銀以外の諸要因に就いて見れば、このことは甚だ容易に何人も推測し得る所であつて、それ等の影響は統計的に確證することが甚だ困難であり、また多くの場合に全く不可能に近い狀態である。唯だ賃銀統計の作成に關してのみ各國に於いて既に相當の努力が拂はれて來てゐる。しかも眞實賃銀の計算が漸く十九世紀の終末以後

J. Kuczynski, Labour Conditions in Western Europe 1820 to 1935, London 1937.　　一五一　　（一〇七九）

注意されるやうになり、相對的賃銀の計算に至つては一九二七年以後、專らクチンスキー自身の努力に依つて開拓されたものである。更らに吾々は今日眞實賃銀と相對的賃銀とを統一して、一ケの指數を以つて勞働者の狀態を確認することも出來ない狀態である。從つてそれ等の事情は勞働者の狀態の過去の、彼の場合には一八二〇年にまで遡つて實證的統計的研究を甚だしく困難なものとする。その結果彼の實證的研究は、先きの理論的考究にも拘らず、專ら賃銀統計に基づいて行はれてゐる。しかもこのことは何人も寬容しなければならないであらうし、唯だそれだけではなく寧ろ吾々は十九世紀の賃銀統計の蒐集及び彼の目的のためのそれの編制に對する多大の努力に對して、相當の敬意を拂はねばならぬであらう。

かくの如くにしてクチンスキーは一八二〇年以後の英獨佛三ケ國の、專ら賃銀統計に據つて、今日に至るまでの勞働階級の生活狀態の變化に關する實證的研究を完成してゐる。そして彼のこの研究の結果に從へば、僅かに年代上多少前後の相違が認められるけれども、大體以上の三ケ國の勞働者の過去狀態は同一の規道を歩んで來てゐるものであると見做され得る。其處でこれを總括して彼は西歐に於ける勞働者の狀態として一般的な結論を與へてゐる。それは凡そ次ぎの如くである。

クチンスキーは彼の觀察せる時代を大體次ぎの如く三時期に區別する。第一期は前世紀の半頃に至るまで、第二期は前世紀の後半、そして第三期は今世紀の初頭以來今日に至るまで。

第一期には長勞働時間、低賃銀、それに勞働者の購買力の不充分、これ等の特徴的事實が勞働階級の健康を害し、彼等の勞働能力を低下した。從つて勞働者の狀態を惡化せしめるかくの如き資本家の搾取方法は永續することなく驕て十九世紀の半頃に至つて勞働條件の改善を必然的ならしめた。

第二期に於ける勞働諸條件の改善は、しかしながら、同時に勞働の强度化を意味してゐたのである。そしてまたこの時代に於ける勞働諸條件の改善は事實海外殖民地に於ける勞働者の生活の犧牲に於いて可能とせられたものであり、それが漸く有力化した勞働組合運動に對して產業平和を維持するに役立ち、また資本家の地主に對する最後の鬪爭に於いて、勞働階級の援助を求めるに役立つたことを見逃してはならない。それは兎も角として、この時代の勞働階級の狀態は一部は確かに絕對的に向上し、或は安定し、若しくは少くとも母國勞働者の場合には、その惡化の傾向が中絕したのである。しかし吾々が母國に於ける勞働者のかくの如き狀態と殖民地に於ける勞働者の狀態とを並せ考慮する場合には、全般的には勞働者の狀態はこの第二期に於いて依然として低下し續けたのであり、時には從前に比してより急速に低下したとさへ考へられる。

第三期、今世紀に入つて以後は巨額の利潤は低下し始め、勞働者の狀態は母國に於いても惡化してゐる。眞實賃銀は低下し、貧困は增大してゐる。今日の勞働者の狀態は四十年前のそれよりも明かに著しく惡化してゐる。勞働者の購買力の低下と勞働强度化の增進とは、益々彼等をして肉體的に勞働强度化に堪へ得ないものとしつゝある。しかも八十年前とは異なり、世界市場は狹隘となり、新市場は開拓されることなく、資本に對する勞働の攻勢は益々有勢となり、利潤の實現は甚だしく困難となつてゐる。

クチンスキーは最近の狀態をかくの如く理解したる後に、將來の勞働者の狀態に對して正に次ぎの如く悲觀的な見解を披瀝して、彼の研究を閉ぢてゐる。即ち云ふ。

西歐資本主義の下に於ける勞働者階級の將來の運命に關して吾々の期待し得る所は、單に勞働者の購買力の一層の低下と、恐らくはまた除々に勞働時間が延長せられるに至ることである。しかも同時に失業は增大するであらう。

J. Kuczynski, Labour Conditions in Western Europe 1820 to 1935, London 1937.

かくて資本主義の存續する限り、勞働者の生活狀態は急速に惡化して行くであらう。

六

私は既にクチンスキーの研究の紹介に余りに多くの紙數を費し過ぎた觀があるが、簡單な結びの言葉を附加して筆を擱き度いと思ふ。

彼の右の如き實證的研究の結論が著しくマルクスの影響の下に立つてゐることは云ふまでもない。そしてそれはマルキストとしての彼に吾々が當然期待し得る所ではあるが、しかし彼のこの結論はまた彼の同種の研究である先きの著作の内には全く求め得ない。若しくは少くとも明瞭に表明されてゐない所であつて、その見解の批判は暫く措き、吾々の注目して見るべき最も重要の點である。そしてこの結論は彼の研究を讀む者をして至極簡單に得られてゐるやうに思はれるかも知れないが、それは一般に勞働者階級史に興味を有するものに對して、また勞働者問題に關心を持つものに對して無視し得ない研究であり、見解である。

唯だ私は彼が最後に附言してゐる所の、勞働者の狀態の將來の見透しに關しては多少の不滿を持つてゐる。しかしそれに對する批判は別の機會に讓り度いと思ふ。

（昭和十二年六月八日稿）

(1) D. V. Glass... The Struggle for Population.
(2) René Roy... Contribution aux Recherches Econométriques.

寺尾琢磨

(1). D. V. Glass--The Struggle for Population, 1936

出生率の近年に於ける急激な低下と、延いて將來人口激減の危機に直面しつゝある點とに於ては、英國も他の西歐諸國と軌を一にする。優生學協會々議(Council of Eugenics Society)が一昨年これが對策の研究を決するに至つたのは、最近の局面の重大化に刺戟された爲で、この場合先づ、既に他の諸國に實施されつゝある人口政策を調査し、これに基いて適當なる手段を確立せんと試みたのは極めて賢明な方法である。本書は、この調査を委托されたグラス氏の報告である。氏は一方多くの理論的文献を渉獵すると共に、他方自ら西歐諸國を歴訪しその實際を調査し兩者を巧みに纒め上げた。本書は本文六章、別註、統計表、索引及びカール・サンダー氏の序文より成る。

第一章は英蘭及ウェールスの人口狀態を記述し、所謂人口の危機を說明する。前世紀中葉の一五‰の自然增加率は今日では六‰以下に降つた。出生率は三五‰から一六乃至一七‰に、生産年齡婦人の出産率は一六〇‰から六五‰に低下した。エニッド・チャールス孃の計算に據れば、一九三五年一月一日の現在人口四〇、五六三、〇〇〇は、百年後の二〇三五年には、最も有利な假定の下に於ても、三三、五八五、〇〇〇に、最も不利な假定の下に於ては僅か四、

(1) D. V. Glass-- The Struggle for Population.
(2) René Roy-- Contribution aux Recherches Econométriques.